
夢見る少女と最果ての少年

クロイ名無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る少女と最果ての少年

【Nコード】

N8572Z

【作者名】

クロイ名無

【あらすじ】

子供の頃、行方不明（住んでいるところでは神隠しと言われている）になった幼馴染である早瀬夏海^{はやせなつみ}を自分のせいだと後悔し続けている轟木恭介^{とどろききょうすけ}

ある日、いつものように神社へ祈りに行くと、不思議な影を見る神社の中を探しても何もなく、出ようとする Suddenly 地震が起こり、家のことが心配で外へ出ると暗闇へと落下し、気がつくとき異世界へそしてそこには探し続けていた夏海がいた

異世界戦闘系小説

小説&まんが投稿屋にて連載済み

プロローグ：後悔

「あのねあのね！私ね、ちょーのーりよくが使えるの！」

…… ああ、昔の夢か

「ちょーのーりよく？」

あの頃。まだ幼かった頃。アイツが…… 早瀬夏海が姿を消す前

「うん！私ね、空を飛んだり、壁を通り抜けたり出来るんだよ！」

いつも変なことばかり言ってて、どこか他人とズレてて、寝ることが大好きな幼馴染

「すごい！見せて見せて！」

あまりにも変なことを言うから、学校でも友達ができず、いつも俺と一緒にいた

「いいよ！でも、誰にも言っちゃ駄目だよ？私と恭介君、2人だけの秘密！」

「うん！」

「じゃあいくよ？…… えーい！」

「……………」

「あれー？」

「どうしたの、夏海ちゃん？」

「えーい！」

「飛べないじゃないか！夏海ちゃんの嘘つき！」

「嘘じゃないもん！昨日の夜は飛べたもん！」

「でも今は飛べないじゃないか！」

「昨日は飛べたもん！」

「夏海ちゃんの嘘つき！もういいよ！」

昔の俺はそのまま帰ってしまう。昔の俺の後ろでは夏海がうずくまって泣いている。まだ「嘘じゃない。嘘じゃない」と言いながら泣いている。……けど、昔の俺はそんなことを聞きもしないで歩いていく

行くな

心の中で昔の自分に叫ぶ。しかし、当然のことながら昔の自分の足は止まらない。これは自分の記憶を元に作られた夢。だから足を止めるかもしれない。……けど、止まったとしてなんだというのだ。事實は変わらない。この日を悔いても、どうにもならない。それはもう十分に理解している。けれど、この夢を見るたびに叫ぶ。

行くな

叫び続ける。昔は当事者。ただ、今となってはただの傍観者に過ぎない自分には、もうそれしかすることはない。叫び、何もできない自分を悲しみ、夢から覚め、いつもと同じ日を繰り返し、時たまこの夢を見て、叫ぶの繰り返し。ただそれだけだ。

悲しい日常

頭の真上から大きな音が聞こえてくる。普通ならありえない現象だが、今はベットに横になってる状態。俺は音の元である目覚まし時計の目覚ましを切り、上半身だけを起こすと、予想したとおり涙が流れた。周りにはもう克服したと言ってある夏海の消失。けれど、実際はこの通り。月に数回はあの夢を見て涙を流す。夏海がいなくなったのは自分のせいかどうかは分からない。……けど、おそらく……いや、絶対に、あの時夏海と一緒にいれば夏海はいなくならなかった。

あの日、いい加減に夏海に付き合いきれなくなり、怒って先に帰った後、夜になっても夏海が帰って来ないと夏海の親に言われ、不安になり大勢で探し始めた。まだ子供だった俺も一緒に探した。夏海の行きそうな所は全部探した。……けど、どこにも夏海はいなかった。大人は神隠しだと言った。この町には大きな神社があって、俺や夏海は勿論、学校の人もよくそこで遊んだりしていた。夏には肝試しに使えるほど夜中は不気味で有名な神社。町の人は未だに神隠しなどを信じていて、その神社の神様が連れて行ったと言った。俺はその時になって、自分の行動を嘆いた。なぜ、あの時夏海を置いていったのか。突然涙が込み上げてきて、泣いた。母に抱かれ、家に帰ってから泣き続けた。そして泣き疲れて寝た。しかし、起きても自分のしたことを責める気持ちは治まらない。俺は神社に行き、神様をお願いした

夏海を返して下さい

勿論、そんな頼みが聞き入れられるわけがない。夏海は返ってこない。けど、今の自分出来るのは願うことだけ。

俺は涙を拭き、制服に着替える。着替えた後にもう一度涙が出て

いないかを確認め、目が赤くなっていないかを確認める。もし赤くなっていたときは親にバレないよう、誤魔化す口実を考えないといけないから面倒だが、幸いにも今日は赤くなっていないようだ。

俺は荷物を入れた鞆を持って下に降り、リビングへ行った

「おはよう、父さん、母さん」

「おはよう」

「おはよう」

リビングの椅子に座って新聞を読んでいた父さんと、朝食の最後の仕上げをしている母さんに挨拶をして席に着く。季節は夏。もうじき夏休み。……ただ、高校3年生である俺にとって、夏休みは決して楽しいことばかりではない。夏海のことと普段から集中できていない俺は現在、志望校に行けるかどうか怪しい。この機会にでも勉強しなければ、この不況の時代に高卒で働かなければならない。だから、この夏休みは遊ぶことは考えないようにしようと決めている。

俺は母に盛り付けられた朝食を食べながらテレビを見る。親には受験のためにニュースを見ていと言っているが、本音では夏海の手がかりを探している。ご飯を食べながらニュースを見ていく。

【中学校に盗撮犯が現れる】【買い物帰りの主婦への轢き逃げ】【有名芸能人のスキャンダル】【連続殺人犯、とうとう捕まる】

ニュースをザッと見る。夏海に関するニュースは当然ない。今更見つかるわけがない。頭ではそう分かっているけど、ニュースを見る。ニュースが中盤に差し掛かると、俺はテレビを消し、鞆を持って立ち上がる。

「行ってきます」

「いつてらっしゃい」

両親に返事をして玄関を出る。外に出ると突然暑い空気に包まれる。俺はドアを閉め、一瞬止まるがすぐに歩き出す。夏になると毎年暑さで学校に行きたくなくなる。けど、行かないわけにはいかない。俺は暑さを気にしないようにしながら歩き続ける。家から学校

まで、幸いなことに坂は少ない。だから、夏のこの時期でも、そこまで体力は使わないで済む。元々運動神経だけならいい方な俺だが（それでも平均よりやや上な方だが）無駄な体力を使って、元々無いような集中力を更になくさないでいいのは嬉しい。

俺はそのまま淡々と歩き続ける。何も考えないように勤める。夏の海のことを考えると、時間がいくらかかるかも分らない。考える必要はない。考えてはいけない。

学校に着くとチャイムが鳴るまで近くの友達と話をする。昔は夏海と一緒にいたせいか友達がなかなかできなかったが、今では仲がよい友達はある。その人なんでもない話をする。いくら勉強があまりできないと言っても、休み時間にまで勉強をする気はない。

授業が終わるとそのまま家へ帰る。友達の中には遊びにいかないかと誘ってくる人もいるけど、俺はそれを断る。流石に放課後に遊ぶ暇はない。

家に帰ると、少し休んで勉強を始める。

……そして夜中になると、俺は外へ出る。あの日から毎日していること。

神社での祈り

その神社はなぜか山の中にあつた。それも林の中に自然にできたであろう空地にポツンと建物がある。無人で、賽銭箱さえない。とは言っても、昼間にはそれなりに光が届くので、遊び場所としてはもってこいの場所。俺は手を叩き、神様にお願いする。

夏海を返して下さい

俺は基本的に神様を信じない。でも、夏海が消え、大人が神隠しだと言い、神隠しとしか思えない現状、神に祈るしかできることはない。俺は祈り終わり、目を開け、いつも通りに帰ろうとすると――

「え!？」

建物の中に何かが見えた。無人のはずの神社に人のような影。……いや、見えたのは上半身だけだから、子供の悪戯という可能性もある。けど、俺の頭の中からその考えはすぐになくなった。その考えをなくした理由などない。ただ、数年も祈り続けて、今日、突然人のような影が見えた。それだけけど、俺にはその影が夏海のような気がした。俺はすぐに神社に近寄り、開けた

「夏海!」

しかし、そこには何もなかった。夏海どころか、悪戯の後さえなかった。けれど、俺は諦めきれずに中を探した。床に抜け穴はないか。壁に扉はないか。

……結局、そんなものはどこにもなかった。俺はそこに……中央に座り込んでしまった。見間違いかもしれない。いや、確かに影が見えた。悪戯かもしれない。いや、あれは夏海だ。夏海は消えた。嫌な考えを否定する反面、望みの可能性すら否定する。

俺はとうとう立ち上がった。そして、ここに来るのを止める決意をした。ここに来るから夏海のことを忘れられない。だから幻覚なんかを見てしまう。俺は最後になるであろう神社の中を見渡した。中は特になんてことはない作り。でも、何年もこの外で祈っていたのかと思うと、ただの建物には見えない。一通り見渡し、出口の扉に手を掛けた。その瞬間――

ゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

地面が揺れた

すぐに地震だと分かり、体勢を保つ。そのまま神社の中央へ。地震の揺れは長かった。しかし、構造がしっかりしているのか、神社は崩壊することなく、ホツとした。揺れが収まっても俺は数分、その場でジツとしていた。……しかし、結局はもう揺れることはなかった。俺は親の安否が気になり、すぐに立ち上がって、扉を開け、足を踏み出した……が、違和感があった。

何もない。感じるはずの板の感触が足から伝わってこない。そう

思った瞬間、体重を前にかけていたせいで前に倒れた。しかし、そこには地面がなく、暗闇が広がっていた

「うわああああああ！」

落ちる。一瞬、死の恐怖を感じた。が、その落下はすぐに止まった。背中に強い衝撃を受け、気絶してしまうのと引き換えに

ソフィア

目が覚めたときには見慣れない天井があった。木で作られた屋根。それは自分の家と同じなのに、どこか見慣れない。そこから自分がどうなったのかを思い出す。確か俺は神社にいたはず。その後、人の影を追いかけて中に入り、地震が起きた。そして……外に出ると落ちた。

その考えに至った瞬間、俺は跳ね起きた。こうしてはいられない。ここはどこなんだ

「やあ、起きたんだね」

突然声が聞こえ、反射的に声の方へ向いた。そこには30代……いや、もしかしたら40代ぐらいの男が立っていた。眼鏡をかけていて、背が高く、青色の目と髪をしていた。俺が40代だと思っただのは、顔はまだ若そうなのに顔には無精ひげのようにひげが伸び、髪もボサボサでやつれて見える。白衣を着ていることから医者と思えるけど、まだここがどこだかも分からない。病院ならこんな木造なわけないし、俺が倒れた神社の近くには1つしか病院はない。その病院にこんな場所はない。

「何か後遺症はないかい？見たところ外傷はなく、頭にたんこぶがあったから、頭を打ったんだろ？」

……この人は何者なんだろ。そもそも、青い髪が地毛の人などいるのだろうか？もし染めているなら、医者がそんなことをするのだろうか？

「もしかして……喋れないのかい？」

俺が考え込んでいると、医者らしき男性は椅子に座り、不安そうにそう聞いてきた。どうすべきだろうか。明らかに怪しすぎる男性。そして状況。……けど、ここがどこだろうと、とりあえず家に帰らないといけない。

「いえ、喋れます」

「ああ、よかった。黙ったままだから心配したよ」

その顔は本当にホッとしたようで、心から俺のことを心配していたのが分かった。とりあえず、悪い人ではなさそうだな

「あの……それでここはどこなんですか？」

「どこ？何を言ってるんだ。ここはファースト・アイランドだよ。」

ファースト・アイランド？

「君は……セントラル・シティーへ行くためにここへ立ち寄ったんじゃないのかい？」

どういうことだ？ここは日本ではなくファースト・アイランド。アイランドということは島だ。俺は日本とは違う島に来た？……とりあえず、なんとか情報を集めないと

「あの……ここは地図のどこに位置しているんですか？」

「どこ？……失礼だけど、やっぱり君は……頭を打って記憶が変になってるんじゃないかい？」

医者男性はさつき以上に心配そうな顔をして俺を見てくる。……

つまり、それだけこの島を知らないということは異常。これは……考えを改める必要があるかもしれない

「あの……今の自分の知識が正しいか確かめるために、今からの質問に答えてほしいんですけど」

「ああ。いいけど……」

まずは何から話そう。……そうだな。まずは一般的な常識からだ。

「この世界で一番大きな大陸って……なんですか？」

このぐらいの知識はこの男性ぐらいの年ならあるはずだ。

「セシルムさ」

「……なら……ピラミッドや自由の女神って、分かります？」

この2つを知らない人は滅多にいないだろう。……けど、これを知らなければ本当に考えを変えないといけない。そして――

「いや、知らないな」

その言葉からも、表情からも、嘘をついているとは思えない。け

ど、セシルムなんて大陸は聞いたことがない。

「……………」

「どうしたんだい？」

どうしよう。可能性としては2つある。

1つ目は初めから俺の知識が間違っている。頭を打ったショックで、おかしくなった。

2つ目は違う世界へ来た。

……けど、2つ目の可能性より1つ目の可能性の方がよっぽど現実味がある。頭を打つ前の俺は相当な夢想家で、頭を打ったせいで妄想と現実の認識が逆になった。そう考えた方が自然だ。……少なくとも2つ目よりは……

「……………」まあ、君の頭がおかしくなったのかは分からないけど、とりあえず自己紹介はしておくよ。僕の名前はアリユー。一応このファーディスト・アイランドの医者さ。もつとも、こんな老けたオッサンだけだね」

アリユーと名乗った男性は俺を元氣付けようとしたのか、そんなことを言って笑っていた。それを見た俺も少しだけだけど元氣になって、作り笑いをする余裕は出きた

「よろしく願います。俺の名前は……………」

「どうしたんだい？」

そこで止まったのは名前を思い出せないからではない。俺の名前は轟木 恭介。……けど、この男性はアリユーと名乗った。この世界が例え異世界だろうと、俺の認識が変になっただけであろうと、この世界は存在する。そしてこのアリユーという名前に対して轟木恭介というのは明らかにおかしい気がする。

「名前……思い出せないのかい？」

けど、この男性にどう言う？俺は違う世界から来たと言うのか？いや、それこそ俺の精神を疑われる。実際に精神異常ならともかく、あまりにも元の知識が豊富すぎる。もし単に頭を打つ前の俺が夢想家だったなら、おそらくここまでの知識はないだろう。それが否応

なく可能性の1つ目を消してしまう。だからこそ、今は敵を作るわけにはいかない。これから先、元の世界に帰る可能性を見つけるためにも、怪しまれないように、ただ、頭を打っただけ、シヨックでちよつと変になった程度に思わせないといけない

「いえ。俺の名前は……ライです」

『ライ』。それは中学の頃、友達が付けたあだ名。『轟木』だから『轟く』で雷。いかにも中学生……というより、中二病者が考えそうな発想。とは言っても、その名前は1日で消え去った。だから今思い出したのは奇跡に近い。

「そうか。ライというのか。まあ、頭が混乱しているうちは困るだろうけど、すぐに慣れるさ。セントラル・シティーに行くのだって急ぐ必要はないだろう。どうせ決行まで後数ヶ月かかる。」

決行？

「あの。セントラル・シティーには何があるんですか？何を決行するんですか？」

とりあえず今は知識がいる。混乱していると思わせたなら、何を聞いてもおそらく変には思われないだろう。なら、早めに聞けることは聞いておくに限る

「ああ、それは……。」

アリュールさんはそこで言葉を止めると、何かを考え込むような仕草をしたかと思うと、逆に質問をしてきた

「その前に聞いときたいんだが、ソフィア様は分かるかい？」

「ソフィア様？」

様を付けるぐらいだから、偉い人なのだろうか？それとも神のよ
うな存在？

「分からないか。」

「はい」

「ソフィア様とは……うゝむ、なんと言うべきか……」

……つまり、やはり実体のない神のようなものだろう。口で説明できないということは、そういうことだと思ったけど……違った

「まず、ソフィア様は数年前、突然現れた。」

「現れた？」

「そう。そして、今も生き続けている。そして――」

そこでアリューさんは言葉を止めた。なぜなら、突然、外が騒がしくなったからだ。

「どうしたんですか？」

「そうだったな。今日はソフィア様の披露式の日。」

アリューさんはブツブツ言い出すと、突然「よし」と言い、立ち上がった

「まずはソフィア様を見に行こう。そうすれば、何かを思い出すかもしれない」

アリューさんは強引に俺をベツトから起こすと、そう提案した。俺としても断る理由はないし、この人が言うソフィアというのが実体があるなら、見ておく価値はある。

そう思い、アリューさんに続いて外へ出た。外に出ると、人が村の中心に沢山集まっていた。どうやらこの家は全て木造のようで、歴史の教科書などで見た昔の家が思い出された。家は広場のような空地を中心に、円状に家が建っていた。そして、広場を中心に、十字の形の道があり、家の区画を4つに分けていた。

俺とアリューさんは人ごみをかき分けて広場の中心へ向かうと、広場の中心には大きな建物があり、人3人分ほどの高さがあった。そしてその頂上からは水が上から建物を伝って流れてきて、途中からその水は下の池までヴェールのように流れる。……しかし、周りの人はその噴水の水のヴェールを見るだけでソフィアと思われる人はどこにもいなかった

「あの……ソフィアさんは？」

「もうすぐ見られるさ」

アリューさんはそう言うと、他の人と同じように噴水の水のヴェールを眺めた。俺はどうすればいいのか分からず、ただソワソワすることしかできなかった。しかし、数分もたったころ、突然声が聞

こえた

「こんにちわ、皇国の諸君。」

その声は若く、アリューさんより若い男性のものようだった。俺はその声に驚き、慌てて周りを見渡す。しかし、その中の誰も喋っているようでもなく、また、誰も驚いているようではなかった。

「アリューさん、これはいったい……」

「単なる放送だよ。……ほら、もう映像が出る」

映像？そんなものを映すスクリーンなど、どこにあるというんだ？俺がどうしたらいいのか、何が起きているのか分からずにいると、突然、噴水の水のヴェールが輝きだした。しかし、その光は不思議と眩しくなく、直視してもなんともなかった。そして、その光が収まった瞬間、目を疑った。

噴水の水のヴェールに映像が映されていた

その映像には先ほどの声の主であろう金色の髪の若い男性が立っていた。立っているのはどこだか分からないが、後ろの映像は石のようで、アーチ上に作られていて、奥に通路が続いているようだ。この村の家とは作りそのものが違うようだった。

「さて、皇国の諸君。今日は月に1度のソフィア様の披露式。時間もありませんし……貴方たちは私の顔など見たくもないでしょう。なので、堅苦しい挨拶などなしです」

男はそう喋ると後ろに下がり、何かを喋った。すると奥の方から誰かが歩いてきた。左右に兜と鎧を着て槍を立てる護衛を従えながら、その中心に白いドレスを着て、顔には白いヴェールを着た女性。それは一見するとウェディングドレスとも見間違えうようなドレスだった。おそらく、彼女がソフィア様。そして先ほどまで喋っていた男性は深く頭を下げ、彼女たちに道を譲る。女性は先ほどまで男性が喋っていた位置まで歩くと、そのヴェールを取った。そして……その顔を見たとき、俺の思考は一瞬停止した。

対照的な長く黒い髪。清楚な顔立ち。そして、その表情はほとんど無表情と言ってもおかしくはなかった。……けど、その女性は

——間違いなく……夏海だった

何年も探し続けてきた幼馴染が目の前にいた。他人の空似かもしれない。この数年で体格も成長していた。けれど、俺の直感が言っていた。あれは夏海だと。そして、女性は喋ることもせず、ただただこちらを見続け、数分後、こちらに背を向け、再び護衛を従えて歩いていった。

彼女が去っていくのと同時に、周りに集まっていた人たちも散らばり始めた。

儚い希望

「ライ。……………ライ！」

突然、横で叫ばれた。少しの間、夏海を見たせいで安心して自分の新しい名前へ対応ができなかった。

「とりあえず、家に帰ろう」

アリューさんは俺が体調を悪くしたとでも思ったのか、心配そうにそう言うと言き出した。周りには既に俺たち以外の人の影はなく、2人だけになっていた。俺は慌ててアリューさんを追い掛けた

「それで、何か思い出したかい？」

家に着くとアリューさんはコーヒーのようなものを淹れ、俺を席に着かせた。

……………しかし、俺はどう答えるべきなのだろうか。もし俺の直感が間違っていないなら、ソフィアは夏海だ。俺の大切な幼馴染。けれど、アリューさんたちはソフィアを神様のように扱っている。横目にだが、沢山いた人の中……………特に老人はソフィアが現れたとき、手を合わせて拝んでいた。もしここで彼女は俺の幼馴染の夏海だなんて言ったら、どうなるか分からない。だから――

「いえ、何も」

「そうか……………」

アリューさんは自分のことのように残念そうな顔をして、ため息をついた。そして、さっき自分にも出してくれたコーヒーのような黒い液体を一口飲み、話し出した

「じゃあ、ソフィア様について教えるよ」

「お願いします」

さっきまでは軽い気持ちで聞こうと思っていたソフィアの話……………けど、もう軽い気持ちでは聞けない。少しでも多く、ソフィアのことを知らなければならぬ

「まず、ソフィア様が数年前、突然現れたのは話したたる」

「はい」

数年前、突然現れた。これはただ、俺がソフィアは夏海だと信じていた気持ちがそう思わせているのかもしれないけど、数年前、夏海は俺と同じようにここへ来た。俺にはそう思えた。……いや、それ以外は考えられない

「そして、正確にはどこにソフィア様が現れたのかは知らないけど、ソフィア様はセントラル・シティーで保護された。初めはただの迷子のソフィア様をどうするか考えていたとき、ソフィア様に関して、1つだけ分かったことがあった」

「分かったこと？」

「そう。ソフィア様は寝ている時、とてつもないエネルギーを生み出す。それがなんのエネルギーなのか、なぜそんなエネルギーを出せるのかは分からないけど、セントラル・シティーの科学者はそのエネルギーを使う装置を作った。結果、さっきのような映像などの高度な機械を使うことができるようになった。ソフィア様の力は膨大で、国全体に力を供給しても有り余るほどの力だったんだ。」

夏海にそんな力があつたのは驚きだが、この世界で俺の常識は通じないと思つた方がよさそうだ。この世界と俺の世界では根本的に違う、そう思ふべきだろう。そう思えば、俺たちとこの世界の人の構造が違い、寝てるときに分泌される何かをこの世界の人は利用できたと考えられる

「……けど、ソフィア様だつてずっと寝てるわけじゃあないでしょ？」

いくら寝るのが好きだった夏海でも、そんなにずっと眠つてはいられない。この世界がどれだけ広いのかは知らないし、夏海の力がどんなものか、どれだけ大きいのかも知らない。……けど、そんなにも長く使えるわけがない

「そう。だから、噂では強制的に眠らせてるんじゃないかなんて噂が流れていた」

「！……けど、それなら誰かが見に行けばいいじゃないか。会うことも許されないんですか？」

その言葉を聞いた時、アリューさんの表情が暗くなった。俺はすぐに相当悪いことを聞かされると分かった。俺は次にどんな言葉が来てもいいように身構える

「こんな風に発達したのは、あることが起きてからなんだ」

「あること？」

「ああ。それまではソフィア様の力に頼ってはいたけど、いなくても生活できるほどだった。……けど、ある日、どこから現れた者たちにこの地は侵略された」

「え！？」

「彼らは圧倒的な力でこの地を攻めた後、ソフィア様を誘拐して僕たちに無条件降伏を求めた。彼らはセシルムを奪い取り、そこを拠点にした。その後、無条件降伏を受け入れた僕たちの国は生まれ変わった。中には今の国の方がよかったと思う人もいるけど、僕はそうは思わない」

「……どうなっ たんですか？」

「彼らはソフィア様の力を僕たちにも供給して文明のレベルを上げた。ソフィア様を誘拐された時点で、僕たちは抵抗できなくなった。けど、文明のレベルを上げ、さらにソフィア様なしでは暮らせないようにすることによって、ソフィア様の人質の価値を上げてるんだ。噂ではソフィア様の力を利用する装置も、大本はこちらが作っていたらしいが、完成させたのはあちららしい。そして、ソフィア様を月に1度見せることで、生きていることも証明している」

……これは予想以上だ。俺は初め、夏海を見たとき、呆然としたのと同時に喜んだ。アリューさん達の様子からすぐ会えると思ったからだ。……けど、実際は全く違う。夏海は今、この俺のいる国に対立している国にいる

「あの……なんとかしてソフィア様に会う方法はないんですか？」

駄目もとで聞いてみる。もし会えるなら、とうに取り返している

だろう。攻めて来たときだって、圧倒的な力で捻じ伏せられたと言っていた

「残念なならないよ」

答えは予想通り。俺は俯き、拳を握る。ずっと探していた夏海。その夏海を見つけた。……けど、決して手は届かない。ようは地上から見えない星が見えるようになっただけ。見えても見えないでも、決して届かない。

「……………」

黙り込んだ俺をどう扱うのか迷っているのか、アリュールさんは視線を迷わせながら言葉を選んでいる

「……………」

「え!?!」

アリュールさんはゆっくり口を開き、言い難そうに口を動かし、視線を漂わせた。しかし、少しすると決意したように声を出した

「あくまで可能性なんだが……ソフィア様に会う可能性はないこともない……………」

「本当ですか!」

「ああ。……けど、オススメはできないよ」

「なんですか!教えてください!」

例え危険なことだとしても、夏海に会いたい。そのためなら、なんでもやってやる。

アリュールさんは教えるべきかどうか少しの間迷っていたが、ついには諦めたように口を開いた

「ソフィア様が誘拐されてから大体半年に1度、奪還作戦が行われる。」

「奪還作戦?……じゃあ、もしかしてセントラル・シティーで決行されるのって!」

「そう。奪還作戦。……だけど、僕は君にそれに参加してほしくない」

「え!?!」

「なぜ、半年のように行われる奪還作戦を敵国は止めないと思う？」

「それは……」

確かにそれはおかしい。無条件降伏したのに攻めて来る敵を放って置くのはおかしい

「彼らは……絶対の力の自信がある。攻めて来ても、勝てる自信がある。だからこそ、攻めて来るのを咎めず、ただ、攻めてきた者を皆殺しにする。そうして力関係を分からせようとしているのさ」

想像してみる。いくら攻撃してもビクともしない巨大な岩。それは、攻撃している間に戦意を失わせ、諦めさせる

「だから、君がいつでも死んでしまうだけなんだ。なぜソフィア様に会いたいのかは分からないけど、この方法だけはやめてほしい」

アリューさんはそれだけを言うと、立ち上がって家を出て行った。俺は……どうすべきなんだろうか。夏海に会いたい。その気持ち

は変わらない。……けど、会いに行けば確実に死ぬ。なんの武術の心得のない俺が立ち向かって勝てる相手ではない。なら大人しく引くか？……いや、そんなこともできない。ようやく会えたんだ。だから……夏海と一緒に絶対に元の世界に戻る。とりあえず、明日はこの世界のことを知ろう。なんでもいい、とりあえず知っておいて損はないだろう。決行までまだ数ヶ月あると言っていた。

結局、その日はアリューさんの家に泊めてもらうことになった。

原点

起きると誰もいなかった。上半身だけを起こして辺りを見渡しても、アリユーさんもない。昨日見た感じだと、この家に時計がないので時間は分からないが、南向きに入り口が作られているこの家の入り口に光が斜めから差し込んでいるのが見える。おそらく、もう昼近いのだろう。

俺はベットから起き上がった。元々この家はアリユーさんの1人暮らしで、来客用の布団、ベットなどがない。だから俺は怪我人用のベットで寝ることになった。初めはアリユーさんが客人をこんなところで寝かせるわけにはいかないと言い張ったが、元々俺はここをすぐ出て行くつもりだし、アリユーさんに迷惑をかけるわけにもいかないのでもこちで寝たのだ。

俺は靴を履き、外へ出る。外に出ると昨日とは違い、ほとんど人がいなかった。俺はとにかくアリユーさんを探すべきだと思い、噴水の所まで歩いた。

噴水までは近くで、家から出た瞬間にもアリユーさんはいないと分かってはいたけど、ここから四方に道が分かれているので、見やすいと思ってきたのだが……アリユーさんの姿はどこにも見えなかった。

「あの。アリユーさんを知りませんか？」

俺はちょうど近くを通りかかった洗濯ものを抱えた主婦らしき人に道を尋ねた

「アリユーさん？彼なら北の方の森に行ったよ」

「北ですか？ありがとうございます」

俺はお礼を言い、主婦の人が指差した北の森へ歩いていった。

この村は東西南北が森に囲まれている。昨日地図で見た限りではそこまで大きな島ではないが、全体では一度迷うと二度と出られそうにないぐらいの広さはあるようだ。

昨日、アリユーさんから聞いた話によれば、東の森には凶暴な動物などが住んでいて危険らしい。なぜ東にしか生息しておらず、繋がっているはずの北と南、そして村に入ってこないのかは村の人にも分かっていないらしいが、とにかく東は危険らしい。

そして西には逆に、大人しい動物が住んでいるらしい。最も、大人しいとは言っても東に比べればという話で、危険なことには代わりはないらしい。

南の森には森らしいところはなく、森の部分が少ない。数分も歩けば船着場に着く。東西に比べれば、なんの変哲もない、しかし、最も使う森らしい。

北の森にも生物は住んでおらず、薪を拾いに行くぐらいしか行くときはないと言っていた。

アリユーさんが北の森へ向かったということは、薪の数が減っているのだろう。

この村は俺の住んでいた所とは比べ物にならないほど原始時代の生活をしている。野菜を自分たちで育て、狩りをし、手で洗濯する。アリユーさんに聞いた話だと、セントラル・シティーでは自給自足などせず、聞いた限りでは俺のいた世界と近い生活をしているらしい。

俺はアリユーさんを探しに森へ入った、森は案外明るく、木々の間から日が差し込んでいる。俺は地面から出ている木の根に引っかかるように歩く。木の根などにキノコがあったり、そこら中に枝や葉が落ちているが、これといってなんの変哲もない森。アリユーさんから聞いた通り、動物もいない。虫や鳥なら飛んでいるが、害はない。俺はそのまま歩き続けていると、開けたところにアリユーさんが屈んでいるのが見えた。

「アリユーさん」

「ああ、起きたのかい」

「すみません。こんな時間まで寝てしまっ」

「いや、気にすることないよ。よっぽど疲れていたんだろ」

アリューさんはそう言って笑うと、近くにあった茂みに近づいて調べ始めた。

「あの……何をしてるんですか？」

「ああ。昨日は言ってなかったけど、君が倒れていたのはここなんだよ」

「え？」

ここに……俺が倒れていた？俺は何もないのを承知の上で、辺りを見渡した。来た道にも、周りにも、当然何もない。木ばかりの空間。

「君はちょうど、この開けた場所の真ん中辺りで仰向けに倒れていたんだ。」

「……そうですか。助けていただいて、ありがとうございます」

「いや、気にすることじゃないよ」

「……でも、それでなんでここを調べているんです？」

アリューさんは茂みを調べ終わったのか、今度は木を調べながら話し出した

「君はこの中心辺りに仰向けに倒れてたって言ったよね？」

「はい」

「でも、その中心まで最も近い木を使ったとしても見ての通り10メートルは確実にあるんだ」

確かに、中心までかなりの距離がある。頭にタンコブができていたということは、少なくとも頭を打っている。もっと狭い場所なら木から落ちたと考えられるが、この場所では明らかに無理がある。

「まあ、考えても仕方がない。とにかく、君が無事でよかったんだから、今後は気をつければいいさ。」

アリューさんは諦めたのか、そう言い、こちらへ寄って来た

「さて。僕はもう帰るけど、君はどうする？」

「………少し、ここら辺を見て行きます」

どうして神社から落ちるとここに着いたのかなんて分からない。けど、この辺りを探索してみる価値はあると思う。少しでもいいか

ら元の世界に帰る可能性が欲しい。夏海を取り返せたとしても、帰れなければ意味がない

「そうか。じゃあ、僕は家で昼食を作って待ってるよ」

そう言っているとアリユーさんは俺が来た道を歩き出した。俺はアリユーさんが見えなくなるまでその後ろ姿を見送り、歩き始めた。

この場所はアリユーさん調べたので、もう少し離れたところを探してみた。………けど、やはりなんの変哲もない森。

「……よし。もっと奥へ行ってみよう」

俺はそう決め、歩き出した。開けた場所からはどんどん離れていく。

影

……何分歩いただろうか。かれこれ数十分歩いた気がする。そして、ようやく今の状況がヤバイと分かった。辺りは昼だというのに真っ暗で、夜と大差ない状態になっていた。別に突然暗くなったわけではない。気づかないほどゆっくりと暗くなっていった。だからこそ、奥に来過ぎたのだ。俺は急いで反転して、来た道を戻り始めた。

「……………」

しかし、一向に明るくなる気配などない。……いや、むしろ暗くなっている気がする。どうしよう。今どの辺りだろうか？このまま奥に進めば帰れるだろうか？ここは島だ。真っ直ぐ行けば、いつかは海に出る。そこから太陽で方角を確認して帰るか？

ガサツ！

「！」

突然、何か音がした。茂みが揺れる音。誰がいる！？いや、もしかしたら動物かもしれない。……けど、なんでこんな所に？しかし、俺は慌てて辺りを見渡すが、どこにも何も無い。いるけど暗くて何も見えないだけかもしれないが、見たところ誰もいない。俺は警戒したままさっきまで向いていた方角へゆっくり体をむき直すと

「わあ！」

そこには何かがいた。暗闇の中、更に黒い何かの影。俺は驚きの余り座り込みもうとしてしまふのを堪えた。しかし、膝は震え、一歩も動けなくなってしまう。辺りは暗いのに、更に黒い色で存在し、はつきりと認識できる。明らかにおかしい。少なくとも、普通の色ではない。いや、色ですらないとも思えるほどだ。その黒い影はその場でユラユラ揺れているだけで、害を与えてはこない。膝の震えは止まらないものの、ほんの少しだけ、考える余裕は出てきた。あれはなんなのだろうか？この世界は俺の世界とは違う。魔法や霊体

などがあってもおかしくない。そもそも、ソフィア……夏海の力だつて、俺の常識では考えられない力だ。俺は警戒しながら、震える足で少しずつ下がる。アレがなんなのかは知らないが、あまり関わりになりたくない。元々ホラーが苦手な俺には精神的に毒だ。

その影は全く動かなかった。俺が後ろに下がっているのに気づいているのか、そもそも俺に気づいているのかさえ分からないが、全く動かなかった。

……いや、動かなかったはずだった。

しかし、影の大きさは変わっていなかった。大きくなることも、小さくなることもなかった。まるで俺が動いていないかのよう。

俺は下がり続ける。しかし、状況は変わらない。俺の下がる速さは早くなる。……けど、何も変わらない。

しかし、変化は突然起こった。

影が……大きくなる。小さかった影。点とは言わないまでも、何の影だか分からないほどの小さな影がどんどん大きくなる。それは人の影のようだった。丸い頭の影に胴体のような影。そして4本の太い棒状の影。もしかしたら人ではないかもしれない。けれど、俺の頭に人以外でこの影と重なるものはない。俺は余計に怖くなり、ついには動けなくなった。例えば人の影だとして、なぜ影が暗闇ではつきりと見える？例えば人の影ではなかったとしたら、あれはなんだ？答えの出ない問いが頭を巡る。その間にも影はどんどん近づく。

ついには目の前にまで来た。影の大きさは俺よりも少し低いぐらいの大きさ。横に長いわけでもなく、逆に細すぎるぐらいだった。影は俺の方を見た。……いや、見たように見えた。見上げたのかどうかすら分からなかった。ただ、ほんの少し影が動き、見上げたような気がした。少しの間、俺と影は見つめ合っていた。目の見えないう黒い影。俺は頭が恐怖でいっぱいになりながらも、なんとか逃げする方法を考えていた。頭の中で決して逃げられないと思いつつも、考えた。

った。もし掴めば、いきなりどこかへ引きづり込まれるかもしれない。

……けど、俺は掴んだ。

やっぱり見捨てておけなかった。例え相手が正体不明のもので、見捨てられなかった。掴んだ瞬間、景色が消えた。……いや、正確には、闇が消えた。目の前がグニャツと歪んだかと思うと、暗闇が吸い込まれるように消えていった。俺は突然明るくなった光景に目が開けられなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8572z/>

夢見る少女と最果ての少年

2011年12月30日17時46分発行